

---

# 柚子ハチミツ

ジャム色黒い

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

柚子ハチミツ

### 【Nコード】

N9064Y

### 【作者名】

ジャム色黒い

### 【あらすじ】

都心から約2時間程。電車を2、3回乗り継ぎすればたどりつくようなところにある村があった。

？（前書き）

一年前昔

？

つい一年前昔の話

都心から約2時間程。電車を2、3回乗り継ぎすればたどりつくようなところにある村があった。

そこはこの情報社会に似つかわしくない半自給自足の生活をいまだに送っているような所で

コンビニ・スーパーはまずない、無人販売所を点々と見かける、村まで途中で車を降りて行かなければならない、いい意味でも悪い意味でも田舎な場所だった。だが人のぬくもりは温かかった。

その村である一人の少年が働いていた。

年10半ばを過ぎたぐらい。年の割に体が発達していて顔も大人びている。

村の人口は約2・30人ほどで、過疎化が叫ばれる今の世の中に珍しい、子供の割合が4割を占めるようなところなのだが、彼一人だけまわりと馴染めてない、いや、どこか浮いているような感じであった。

後、聞いてみると彼は交通事故で両親・妹共にこの村に来る途中で失い、彼一人だけがこの村に越してくる者となってしまうたらしい。

祖父母・親類共に同意を得ないような婚約を果たしてしまった彼の両親は、駆け落ち先としてここを選んでしまったらしい。

それが運のつきかどうかは知るわけがないとして、当然、この村の人たちは不満に思ったが、途中で両親を失い、さらには誰にも助けを求められない彼を突き放すような真似は誰もできるわけがなかったので一応住民として受け入れた。

彼自身、見た目の割におとなしく聞き分けのよい素直な子であったので、村の大人たちは彼のことははじめ可愛がったが、やはり余所者という意識と、無愛想で多くを話す子でもなかったので自然と周りに人は遠のいていってしまった。

当時、彼は進学するつもりはなかったらしい。

しかし、何かの幸運に恵まれたのか、はたまたあの村から居場所を探しに逃げ出してきたのか

今度定時制の高校に通うということで、村で唯一頼れる人間として私にあてが届き

あれからどんな成長をしてきたのか期待してた一方、家を機能させて欲しいがために、

溜りに溜まった私の仕事の書類に満ち溢れた空き部屋を貸す代わりに臨時の居候兼家事手伝いとして彼を家に迎えることにした。

？  
（前書き）

A  
M  
4  
：  
3  
0

？

AM 4 : 30

ピピピピピ・・・

窓ガラスを突き抜けてカーテンからもれる冷気のなか  
180度反対にごろんと寝返りをうつた。

(・・・寒い)

やはり冬の朝のぬくもりはどこでも必要だ。不可欠だ。  
こう言っではなんだが全世界のどこの人でもこれは同じ考えなんじやないのか

ましてやこの時期は特に、完全に日が昇るまでは、(ふはあう)、  
出たくはない。

ピピピピピ・・・

(うるさいなあ)

未だにこの無機質なけたたましい時計に慣れることができない。  
初めは慣れようと頑張った。けど、結局気にして眠れなくなった。  
ならしょうがない。諦めようと思えたらいいけど朝起きるためのツ  
ールはこれしかないわけで  
これならまだあっちの鶏のけたたましさのほうが幾らかましと  
最近は思えてきた。

(この間まで紅葉が見頃のシーズンですとテレビは言ってたのにな)

（気づいたら新年越して三が日七日成人式と過ぎてって1月終わっ  
たし）

（そついや去年なんだよな試験受けたの……。大変だったなあ）

（まず言葉覚えるのに苦労したよなあ。カタカナ語覚えるのしんど  
かったなあ）

（早いよなあホント……）  
ピピピピピピピピ

（いいかげんうるさいよこれ）

彼は目覚ましを止めにベッドから崩れるように這い起きた。

？（前書き）

3週間後

？

村沿いに進んだ先にある田んぼのあぜ道を歩いていくと  
いつもよりも早く里子と里子のばっちゃんの姿が見えた。

3週間後、あたしはあの町に行く

そうと決めたのはまぎれもない、あいつが出て行った日だ。

さんざん迷惑をかけておきながら最後にはさらっと消えてしまった。  
あたしたちがその後どれだけ苦労したかも知らずにどこかにいると  
思うと

思い出すだけで腹が立つし、正直家の庭で三日間顔だけ出してやって  
一番苦い山菜に味気ない沢庵になる元だけ与えてやって生き埋めに  
してやりたいくらいだ。

『蓮ぢゃあーん、そこの籠とつてくれえいー』

「はーいーい」

けれども今回あたしがこの村を出る目的はそれではない。

あたしもとうとう高校に行かせてもらえるのだ。

一時は諦めかけて何も食べれない日が続いたこともあったけど

あのおじさんがあたしにいろいろ教えてくれたり

村のみんなが応援してくれてたおかげでなんとかあの学校に合格で  
きた。

『蓮ー。先週貸した『かーでいがん』早く返しなさいよー』

明後日あたしは借家に下見に行く。

どうやらその大家さんはあのおじさんの知り合いみたいで  
そこで人生初の化粧品も教わるのだ。

ここではみんな基本がスッピン顔だから、歳をとってもたいていの  
顔は迷わず済むって

じっちゃん、ばっちゃんの話も分からなくはないけど

やっぱし女であるからにはこれが期待しないわけがない。

これが前おじさんが言ってた高校でびゅうってやつなのかも・・・

「あ、ごめんー、明後日も使いだいんだけどいいー？」

『今週までだかねー！』

「里子ー」

『何ー？』

「毛玉って気にする方ー？」

『あんたこんたけ近くにいらんだがらふつ々に話さないよ』

「毛玉はー？」

『汚したら来季の田起こし手伝わせるわよ』

「はい・・・」

3週間後が楽しみでしかたないと  
あたしは思った。

？  
(前書き)

4  
分前なら・・・

？

某首都圏国立大学内 第三大学棟 5階ラボ

4分ほど前

(. . . . .)  
(. . . . .)  
(. . . . .)  
(. . . . .)  
(. . . . .)  
(. . . . .)  
(. . . . .) パチパチ

『おい大村。中身こぼれるぞ。火弱めろ。』

(. . . . .)  
(. . . . .) バチツバチバチバチツ  
(. . . . .) ゴボツ

『馬鹿つ。お前！！』

パリッ．．．．バンツ！！！！

ゴボボボボボボボボボ

『おい誰か早く消火器もってこい！！！。急がないとフローリング溶かす。後すぐ換気扇回せ。大村がまたやらかした。』

バタバタバタバタ

『はあ？またアイツ？マジ死ねよ』『ちょっと大村ありえないよそれ。さっきあれだけ注意してたのに』

パタパタパタッ

『大村君、手大丈夫？』『ゆみ、そいつは後でいいからこっち』

『あ、でも、うん…』

テケテケテケテケ

『あいつこないだからおかしいよな』『だから言っただけ。絶対薬やつてるって』『でも腕に傷無かったぜww』『じゃあ吸う系のやつ？』『いや、人殺したのかも』『うはっwwマジかwwそれ』

(. . . . .)

(. . . . .)

(. . . . .)

(. . . . .)

(. . . . .)

(. . . . .)

(薬は. . . . .、やってねえよ. . .)

『では今回のゼミは終わる。実験レポート20枚。来週まで。以上。』

『なあバイトまでサッカーしようぜ』『いいぜww』『お前その』

笑い方やめるキモい」

『何サツカーやんの？』 『やるかwwお前もww』 『だからマジやめろって・・・』

『じゃ、また来週ねゆみ』 『うんまた今度ー』

(・・・)

『大村』

「はい」

『次、備品壊したら単位やるつもりないから』

「はい」

『それとこないだの首都圏外付近の土地調査のレポート、お前だけ出てないぞ。どうした』

「それは・・・、あれは、できません」

『まあ。来たくないなら来なくていいから。考えといて。』

「はい・・・」

1月はとうに過ぎ、陰暦の上ではもう春真っ只中であるというのにこれからやつと本腰をあげて襲いかかってくるような寒さ。

着込んでいるとはいえ気持ち的にはもうがたがた。

もう何日も風呂も入ってない。服だってそろそろ1週間記録更新しそうな勢いだ。

俺は重い体をなんとか動かしながら、大学棟を出て、入り口手前右の自販機の前にへたり込んだ。

(はぁ・・・)

ガサガサであかぎれだらけの手で尻ポケをまさぐりなんとか100円を見つけ出した。

お茶を買おうとしたがやめた。今買うのはもったいない。

一瞬懐かしいものを見た気がしたが、ううん何ともない、何ともないんだと自分に言い聞かせた。

そうだ、今日は晩飯どうしよう。またあの牛井屋の店員にあんな目で見られながら食べるのはさすがにもう勘弁したい。次はハンバーガー屋でコーヒーでもすすりにでも行こうかな・・・。

(・・・じつちゃん、ばつちゃん)

(どうして俺こんな惨めなんだろう・・・)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9064y/>

---

柚子八チミツ

2011年11月27日22時17分発行